

平成26年度知事賞受賞作品

生きるチ・カ・ラ

瀬戸 桃子（埼玉県）

今年のはじめ、父が余命宣告をうけた。末期ガンでもって半年。明るく、冗談ばかりの父から笑顔が消えた。傍らの母も泣いてばかり。おろおろするばかりの私は、何もできない。

そんな時、娘がこんなことを言った。

「私、じじと文通しようと思う。」

孫十一歳、じじ七十歳。今まで、殆ど交流のなかった二人の文通がはじまった。

娘の手紙には励ましの言葉はない。それでも娘の手紙は、魔法のようにじじの心をつかんだ。じじの好きな音楽やドラマの話。じじの子供の頃の夢の話。娘の将来の夢の話。時には、娘のクラスにいるオネエの男の子の話。

ある時、娘が

「じじの未来の夢はなに？」

と聞いた。もう未来なんてこないと思っていたじじは、返事に困った。けれど、文字で書いているうちに、どんどん楽しくなっていた。

じじの夢は、岡山の田舎でピオーネを作ること。しかし、病気になってから、あきらめていた。手紙を出したその日、じじは岡山へ行った。抗ガン剤治療をうけながら作業することは容易ではない。でも、父の顔には、以前のような笑顔がもどった。

いつしか娘は、じじの返事が待ち遠しくて、ポストを開けたり閉めたりするようになった。じじは、文通が「生きる力。」と言っている。私は大切なものを二人から教えてもらった。

あれから半年が過ぎ、もうすぐ暑い夏がやってくる。

二十通目は、

「二人で、岡山へ行く計画だよ。」

娘が、ニコニコして私に教えてくれた。

平成29年度知事賞受賞作品

えがお

上甲 真子（愛媛県 小学生）

わたしにはお姉ちゃんとお兄ちゃんがあります。お姉ちゃんはダンスがとくいでいつもおどってます。お兄ちゃんはよこぶえがとくいです。わたしはお兄ちゃんによこぶえでおどるお姉ちゃんにあこがれています。わたしもお姉ちゃんとおなじダンスをならいはじめました。一しよにおどりたいです。

ある日、お姉ちゃんがれんしゅう中に大けがをして歩けなくなりました。リハビリといういたいちりょうをして歩けるようになりました。でも、ダンスはできないそうです。いつもえがおだったお姉ちゃんは毎日ないていました。ママもいつもないてました。わたしはわからないふあんがいっぱいです。なにもできずにそばにいるだけでした。お兄ちゃんもよこぶえをふいてなくて、おうちの中は電気をつけているのにまっくらなかんじがしてつらかったです。

そんな日がつづいてたけど、うちにお姉ちゃんのえがおがもどってきました。お姉ちゃんがお兄ちゃんと一しょによこぶえをふきはじめました。2人ががつそうをするといえの中が明るくなりました。かぞくがえがおでたのしそうにしているとわたしもうれしくなってしまういつものまにかおどっていました。お姉ちゃんのようにはおどれなくてもお姉ちゃんがわたしを見てニコッとしてウインクしてくれました。そのときにわたしがお姉ちゃんの分もおどろうと思いました。今はみんなえがおです。

お姉ちゃんとお兄ちゃんがつそうしてわたしがおどり、パパとママがおきやくさんです。ずっとかぞくのえがおが見たいです。

平成29年度知事賞受賞作品

笑顔の魔法

長友 奈奈（熊本県）

幼い頃、自分は世界一幸運な子どもだと信じていた。

それには理由があった。

ミッキーマウスの目覚まし時計。

母がくれたものだ。

「奈奈、この目覚まし時計にはね、魔法がかけてあるの。

この目覚ましを自分で止めて起きた日には、必ずいいことが起こるのよ。」

魔法の物語が大好きだった私は、とび上がって喜んだ。

次の日から、私の人生はひっくり返った。

通学路でいつも吠える犬が吠えない。

席替えでは仲のいい友達の隣になるし、運動会や遠足の日はずっと晴れた。

この目覚まし時計があれば、私はずっと幸運でいられる。

そう思っていたのに。

ある朝、ベルが鳴る前に目を覚ました。

見てみると、目覚まし時計が止まっている。

「壊れたんだ」

私は真っ青になった。

その日から、今まで溜まっていた不運が私のドアをノックした。

高校受験では受験票をなくす。

入学式の当日に転んで前歯を折る。

バレンタインでは、チョコを入れる靴箱を間違えるという失態までした。

母のかけてくれた魔法は解け、私は世界一幸運な子どもから普通に運が悪い人になってしまった。

そんな私も、不運続きだったわけではない。

結婚したい、と思える人に出会えたからだ。

プロポーズされた時、自分の運のなさとその理由を伝えた。

そんな私を、彼は受け入れてくれた。

新居が決まって引越した夜、私の人生は再びひっくり返ることになる。

新生活のお祝いに、と彼がプレゼントをくれた。

ミッキーマウスの目覚まし時計。

母からもらったものとデザインは少し違うけれど、

それは確かにミッキーマウスの目覚まし時計だった。

「この目覚まし時計には、魔法をかけてあるんだ。

どんな魔法かは、奈奈がよく知ってるよね。

約束するよ。もし何もいいことがなかった日には、

俺が魔法の代わりに奈奈を笑顔にする。」

プロポーズされた時よりも、指輪をもらった時よりも

私は泣いた。そして二人で笑った。

夫がかけてくれた笑顔の魔法は、今も解けていない。